

この原稿は、スタジオジブリからの依頼に基づいて、ジブリのPR誌用に書いたものです。

『木を植えた男』というアニメーション映画を観て書いたものですが、私はこの映画をほとんど評価することができませんでした。事実や現実を土台にして架空の物語を創りだしていくことには、むしろリアリティを高めることもありますが、この映画は自分の主張を押し出すために事実や現実をねつ造しており、キャンペーン映画の悪い側面が出たとしかいいようがありません。

従ってジブリの希望に添う内容の文章にはなっていないのですが、ジブリ側からは批判の部分を削除してほしいという申し入れがありました。当然私は拒否し、それなら掲載中止にしてくれと伝えました。ただし、依頼した原稿の内容が気に入らないから、その部分の削除を求めるというのはあり得ないことであり、それは仮に東電のPR誌から依頼があつて原稿を書いたところ、原発批判の部分は困るので削除してくれといわれたのと同じことになるとも伝えました。

『木を植えた男』の宣伝をしたいというのがジブリの意図のようですが、私はこの意図をある程度配慮するにしても、私自身はジブリの人間ではありませんから、あくまで読者に対して原稿を書くのであり、自分の判断に反する原稿を掲載すれば読者を裏切る行為以外ではなくなってしまいます。

ですのでホームページ上で“一部削除を求めた原稿”を公開します。

とともに、自分たちに不都合な原稿は訂正を求めるといふ、ジブリのファシズム的、スターリニズム的体質にあきれています。

木を植えた男

・・・「自然はローカル世界のなかにある」・・・

内山 節

20年くらい前のことのような気がするのだけれど、初めて「木を植えた男」をみたとき違和感を覚えた記憶がある。メッセージ性の強い作品をつくることの難しさが、そんな感覚を抱かせたのかもしれない。

主張をはっきり打ち出すのは悪いことではない。しかし主張を押し出すために、事実であるかのごとく架空の世界をつくりだしたら作品は現実性を失う。

フランスのプロバンス地方は木の生育に適した自然条件をもっているとはいいがたいが、木を切り尽くしたからといって砂漠になるような地方ではない。南イタリアとは違うのである。木がなくなって草原になっていたというのならわかるが、この地域で草木がなくなるとしたら、たとえば銅鉱山があつて銅の精錬がおこなわれ、そのとき出た亜硫酸ガスが山肌を舐めていくというようなときだけだろう。日本でも足尾銅山でこのような現実が生まれている。ただしこの場合でも何日も歩くほどの広さで草木がなくなることはない。亜硫酸ガスの流れる谷の一面が破壊されてしまうのだから、である。

鉱山による破壊の跡地に木を植えた男がいた、という設定の映画の方が、たとえ架空の創作物語であつたとしても、現実性があつたらう。ところが村の人たちがエゴイストで競争に明け暮れ、森を切り尽くしてしまったと映画は語っている。おそらく現代の人間たちへの批判が、「エゴイスティックで競争に明け暮れる人間たちが自然を破壊してしまった」という設定を生んだのだろうけれど、その設定を20世紀初頭のフランスの村にもってくるのは無理である。この時代のフランスの農山村は小農経営を軸にしてつくられた共同体がまだ力をもっていた時代で、今日からみれば古き良き共同体があつた。それにフランスの林学はドイツ林学との対抗意識を持ちながら19世紀に成立している。ドイツ林学は森から安定的な収入を得ることを目的にし、その結果計画的な木材生産林づくりがすすめられたけれど、フランス林学は森の意義を治山、治水においている。つまりいかに山を安定させ川を安定させるのかという考え方を根底において、それに適した森づくりを考えたのがフランスの林学なのである。それが雑木林の維持を基本におく森林管理を推進させた。この歴史とも映画は合わない。

そんな見方をしていくと、どうしても違和感が出てきてしまうのである。しかしそれは、はじめに述べたように、メッセージ性の強い作品をつくろうとする意識があるとき現れてくるひとつの困難性だと思った方がいい。

私自身はプロバンスに近い山村に暫く滞在していたことがある。ある日村の村長がホテルに私を訪ねてきて、「どうしても君に教えたいことがあるからついてきてくれ」と言う。私は村長の車に乗り、村長は丘の上で車を止めると私に丘の上に立ってごらん、と言った。そうして私に語りかけた。「ほら、感じるだろう。いまアフリカからの風が届いたんだ。待ちに待った風だ。この風がくればもう大丈夫だ。春が来る。山は草や若葉で覆われる。何にも心配しなくてもいい一年が今日はじまったんだ。君にどうしてもそのことを教えなかった。ほら、わかるだろう、昨日とは違う風の香が」。残念ながら私はその風を確認することはできなかったけれど、いまでもそのときの村長の嬉しそうな、開放感に満ちた表情は忘れられない。

村の人たちはそんなふう自然とともに生きてきたのである。とするとそういう世界のなかに生きてきた人たちが、たとえそんなに広くはなくても森が破壊されたのをみて、共同体の力で木を植えていったという設定の方が、やはり現実性も説得力もある。

こんな書き出しになったのは、「木を植える」ことを今日どう考えるのかは、案外簡単なことではないからである。もちろん草木がなくなったような所はあらゆる手段を使って自然を回復させなければならない。ところが現在の日本をみると、そのようなところはほんの例外的にしかなく、ほとんどの所では木を切らなくなった弊害の方が大きくなってしまっているのである。たとえば動物や植物のなかには草原を好む生き物がいる。ところが木を切らないから、山のなかに草原ができなくなってしまった。かつては山を歩けば野兔がいくらでもいたけれど、現在では天然記念物に指定したくなるほどに少なくなっている。草原に暮らす野ネズミも減った。そしてそのことが野兔や野ねずみを餌にする、たとえばキツネなどの生存を圧迫している。そのなかでも私が気の毒に思っているもののひとつにクマタカがいる。クマタカは草原で餌をとる鳥である。鳥は羽を痛めれば致命傷だから、鷹は森の中では狩りをしない。クマタカは羽を広げれば2メートル近くにもなるのである。だから草原で滑空をしながら餌をとる。ところが森ばかりになって餌場を失ってしまった。仕方なく森の切れ目に垂直に飛び降りたりしているのだけれど、これではなかなか餌をえることはできない。

山は多様性があるのが一番いいのである。深い森も重要だ。しかしそれだけでなく

若木が茂る森も必要だし、草原もいる。樹種もさまざまであった方がいい。山はこんな状態のとき、生態系も豊かな、しかも人間にもさまざまな恵みをもたらす山になる。太古の時代なら山火事が自然に草原をつくりだしていたが、いまでは山火事を人間が消してしまう以上、人が木を切らないと草原ができなくなってしまったのである。森に対して人間たちがどんなことをするのがよいのかは、その場所で考えなければいけない。ハゲ山がつづいているような場所では木を植えた方がいいだろう。逆に見渡すかぎり森に覆われているような場所では木を切る必要があるだろう。生育途上の森なら間伐をした方がいい。それらはすべて現場で考えるべきことである。

森のことは森に聞く、それが一番よい方法なのであって森には一般論は通用しない。ある場所では木を植えることが善になっても、他の場所ではそうはならないこともある。自然にとってもそうだし、自然とともに生きてきた人間たちにとってもそうなのである。

たとえば森は保水力をもっているという考え方がある。ところがこれもまたその場所の条件によって一様ではない。保水力、つまり水をためる力をもっているのは土壌であって森ではない。土壌の性格が一番大きな役割を果たすのである。ところがその土壌に雨がしみ込まなければどんなに水をためやすい土壌があっても水はたまらない。とすると何が水をしみ込ませるのか。地面に生えている草や堆積した落ち葉が、である。これらが雨水が流れ落ちるのを防ぎ、いったん水をとどめる。そのことによって土壌にしみ込みやすくなる。そのとき山が森に覆われすぎていると、木の下は光がささないから下草が十分には生えない。その結果案外水がしみ込まないのである。しかも少ししか雨が降らないときには、その雨は木の葉などに受けられて地面まで到達しなくなる。さらに木は蒸散作用もするから、逆に地下水をくみ上げてしまうという面もある。

もちろん私は、だから森はいらないなどといっているわけではない。このこともまた現場で考え、その場所にとってどうするのがよいのかを考える課題だと述べているのである。現場で森の様子や下草の状態、さらに土壌の質をも考慮に入れながら、地元の人に川の水量の変化などを教えてもらう。そうやって考えていくのが一番いい。

自然を守ろうという意識が都市の人たちにも広がってきたとき、この問題で地元の人たちが困った。地元の人たちはこの場所の森はどうあったらよいのか

を考えていたのだけれど、都市の人たちは森一般を考え、すべての森に共通の方策があるという錯覚をもっていた。いまでは都市の人たちも森の複雑さに気づきはじめているが、以前は木を切ることがすべて悪と考える人たちもいた。

自然はさまざまであり、森もさまざまなのである。自然条件がさまざまであるばかりでなく、その地域の自然と人間の関係史もまたさまざまである。その多様性をのなかで自然や森について語ろうとするなら、その場所で考えるほかない。

かつて日本のボランティアが失敗したことがある。それは中国の砂漠化した地域に一生懸命木を植えたことだった。この場所は昔の植生から判断すれば、草原を回復させるべき場所であった。ところが木を植えることがいいことだという一般的な思い込みから植林してしまったのである。その結果どうなったのかといえば、植えた木がわずかしかない地下水をくみ上げ、逆に砂漠を拡大してしまった。

自然を守ろうとすることは、もちろん私も大賛成である。だが一般論で語ることにはあやうさがつきまとう。そのことをたえず自覚していないと、ときに私たちは誤りを犯すことになる。

だが、それだからこそ自然と結ばれるのは楽しいのである。プロバンスの近くの村で村長は風の変化を感じとり、私はそれに気づけない。それでいいのだ。自然はそこに住んでいる人にしかわからない一面をもっている。あの日の私は、村長の満ち足りた表情のなかに、自然と人間の関係する世界を感じていた。